

第1章 金ヶ崎周辺の役割（構想策定の背景）

1-1 東アジアにおける敦賀の位置づけ

環日本海交流における重要拠点

古くから大陸と日本の交流は日本海を介して行われてきました。天然の良港であり、後背地に琵琶湖を挟んで京阪神及び中京の2大都市圏が控える敦賀は、交通の要衝として明治政府からも重要視されていました。このことは、日本海側で最初に敦賀―長浜間の鉄道敷設がされた事実からも分かります。

その後、敦賀―ウラジオストク間の直通定期船の就航と新橋―金ヶ崎間の欧亜国際連絡列車の運転が開始されることによって、敦賀は国際都市として大きく発展しました。

今後の我が国の発展は、成長著しい東アジア諸国との交流に支えられると考えられており、敦賀は日本海を介して世界へ通じる重要拠点と位置づけられます。

敦賀港は、平成23年（2011年）に日本海側における国際フェリー・国際RORO船の拠点港として選定されました。また、舞鶴若狭自動車道路の建設、北陸新幹線の開業など広域交通網の整備が進められ、敦賀の交通の要衝としての位置づけはさらに高まっていきます。

敦賀の発展に向けて、立地特性はもちろんのこと、海陸の交通の要衝として歩んできた固有の歴史文化などを活かすことが重要です。



世界をつなぐ港まち

みんなで拓く交流拠点都市 敦賀

【第6次敦賀市総合計画】

歴史と文化と交流の港まち つるが

【敦賀市都市計画マスタープラン】

敦賀市の最上位計画である「第6次敦賀市総合計画（平成23年度策定）」では、将来都市像として「世界をつなぐ港まち みんなで拓く交流拠点都市 敦賀」を掲げています。

また、まちづくり分野におけるマスタープラン「敦賀市都市計画マスタープラン（平成21年度改訂）」では「歴史と文化と交流の港まち つるが」を掲げています。

このように敦賀市は、陸海交通の要衝としての立地特性を十分に発揮することで、国内外の各地域をつなぐ交流拠点になることを目指しています。

そして、国内外の交流拠点としての本市を舞台とした、市民一人ひとりの主体的かつ責任ある取組を原動力とした発展を図るとともに、多様な人々とのふれあいによって独自の文化を育み、交流拠点都市としての自立を確立することで、本市の魅力を一層高めていきます。

このため、金ヶ崎周辺整備においては、これらの将来像の実現する具体的なアクションとして陸海交通の要衝を象徴する地域として、その歴史や資源を存分に活用しながら「交流拠点の形成」「市民主体のまちづくり」「独自文化の育成」に寄与することが重要です。

1-3 金ヶ崎周辺に求められる役割

(1) 市民の願い、機運の高まりに応える

数々の史実の舞台となってきた金ヶ崎周辺に対する市民の思い入れ、整備に寄せる期待は大きく、市民ワークショップでの熱心な議論や「敦賀・鉄道と港」まちづくり実行委員会が設立されたこと、市民シンポジウムにおける敦賀高校生による提案、アンケート調査結果などからも金ヶ崎周辺が市民にとって親しみの感じられる場所であり、まちづくりの機運が高まりつつあることが分かります。

「港に“のどかさ”を味わいながらゆっくりと時間を過ごすことができる居心地の良い溜り場が欲しい」というのが市民の共通の思いであり、高まる市民の期待に応えるためスピード感を持って目に見える形で成果を上げることが重要です。

(2) 港と鉄道の遺構を活かして愛着と誇りを醸成、中心市街地の活性化に寄与する

敦賀市の中心市街地には、永い年月をかけて積み重ねてきた歴史文化の集積があり、歴史的建造物や伝統的な祭事など愛着や誇りを醸成する資源が詰まっています。

このため、特に歴史文化や都市機能の集積度が高い金ヶ崎周辺を含む4つの拠点と商店街の相互連携による中心市街地活性化を図ることが重要です。金ヶ崎周辺の港、鉄道、人道の物語など、敦賀が最も輝いていた明治後期～昭和初期の史実や遺構を保全するとともに、これらの資源に光を当てて市民がその魅力に触れ、味わうことができるように周辺の環境整備などを進め、広く周知することが重要です。

(3) 観光交流の拠点

統計調査の結果（資料編：資料1参照）からは、中心市街地全体には年間112万人の観光客が訪れ、金崎宮にも11.6万人が訪れているにもかかわらず、敦賀鉄道資料館（旧敦賀港駅舎）には年間2.1万人、人道の港敦賀ミュージウムには年間1.8万人の観光客が訪れるにとどまっており、全体としては金ヶ崎周辺を訪れる観光客が少ないことが分かります。

金ヶ崎周辺がその資源を活かしながら、多くの市民が足を運ぶ居心地の良い場所となったその先に、東洋の波止場と呼ばれ多くの人が行き交ったかつての姿さながらに、金ヶ崎周辺が新たな観光交流の拠点となることが期待されています。

